

く又評者にその資格もないが、本書の各論を通して各人がそれを把握し、それを基礎として更に我國に獨自な西洋史學を建設することが、我々後學の課題であると確信する。

聞く所によれば、先生の最も得意とせられる神話、傳説に關する諸論考が、近く「ギリシア史研究 第三」として上梓される豫定である。先生の研究の成果がかく續々と刊行されることは、我々門下生のみならず、我國學界にとつても裨益する所大なると思ひ誠に慶賀にたへない次第である。(創元社發行・昭和十八年一月・A5列・四圓五拾錢 (前川貞次郎))

猶太建國運動史

菅原 憲著

パレスチナに於ける猶太人の建國問題は、事柄の重要性にも拘らず、問題が地味なためか従來我が國では餘り注意が拂はれて居らなかつた。しかるに小アジアを取得する事なき樞軸側の勝利なぞ考へ得られざる今日、その事からしてもこの問題は絶對的な關心を我々に對して要請してゐるのである。かゝる際この建國問題に對するよき解説書こそ何より必要とされるのであるが、さきに「獨逸に於ける猶太人問題の研究」なる好著を世に送られた著者のこの書の出現は、その希望を滿して餘りあるものと云はねばならぬ。

全十四章よりなる本書の重點は「前世紀の末葉以後」の建國運動に置かれ、猶太建國運動に對する「諸國の猶太人の動向、パレスチナに於ける新舊猶太人の態度、亜拉比亞人對猶太人抗争、並に

それに關する英國政府の對策」の叙述がその内容をなしてゐる。

先づ問題の概観が最初の三章で爲される。建國問題はこのディアスポーラの民の念頭を片時も去るものではなかつた。しかし近代迄はその運動はむしろ空想的であり理論的であるにとゞまつた。十九世紀末ヘルツルが登場するに及んでそれはユートピアとしての問題より完全に現實の問題となり、「思考の時代より實行の時代へ」と移行するのであるが、この間の著者の筆もともに活氣を帯びる。しかしこの希望も猶太人の内紛世界狀勢の變化などによつて空しく消え、ヘルツルは失意の内に逝くのであるが、やがて第一次世界大戰勃發するや英國窮餘のバルフォア宣言となつて各國チオニステンの血を沸かしめ、殆んど彼等の素志は實現するかに思はれた。しかしシリアを自國の帝室主義の支配下にあくまでもおかんとする英國は苦悶と詐略に滿ちた對猶太人亜拉比亞人對策をくりかへし、結局建國は全く實現せず、問題は未解決のまま、一時的な安定を保つに至り、こゝで著者の叙述はとめられる。

豊富な内容に對しかゝる概略は何等意味なきものたるのみならずその價值をも傷けるに過ぎぬ。平明な美しい文章は問題の主要點をあます事なく讀者に傳へるであらう。たゞあくまで感情をころした著者の叙述は時には簡明にすぎてもヨーロッパ史の知識が乏しいと問題の充分浮き出て來ない部分があるのが遺憾と云へば遺憾であるが、それはこの小冊子の限られた紙數では到底望む可からざる事であつて、啓蒙書としては完璧に近いと稱して決して過言でないと思つて、たゞつひでもう一言述べさせていたゞきた

い。それは如何なる理由によるのかこの書に地圖が附してない事についてである。この文庫の性質からも、又適當な地圖が現在入手し難い事情からしても、錦上華をそへる意味でパレスチナ方面の鮮明なる地圖の一枚は是非挿入していただきたいかつたと望むのは望蜀に過ぎるであらうか。(弘文堂發行、教養文庫、定價五拾錢)(會田雄次)

續日本地政學宣言

小牧 實ノ著

本書は先般、講談社より出版された「日本地政學」の姉妹篇である。前著と同様に、既作論考二十一篇の集成ではあるが、大部分は大東亞戰爭勃發以後七ヶ月間の執筆にかかると。彼我を併せ算へる時、兩著のみにても今次戰爭勃發以後僅か數ヶ月間の執筆論考實に約三十篇、私は先づ短日月にかくも多數の論說を諸新聞、諸雜誌よりの依頼のままにもせられた博士の誠意と精力とに頭の下るを覚える。而も著者は「顧みて元來頑健ならざる私がよくもここまで健康を保持し得て來たものであると若干の感慨なきを得ない。」とその序文に記してをられるのである。

今や日本は着々と帝國の理想、使命を實現しつつある。輝かしくも偉大なあの十二月八日以来日本人の歩調は揃つた。歐米依存主義者、崇拜者も驕然自己の非を覺つたかに見える。然し至日本人が本當に腹の底から覺醒し日本が世界の中心たる事を判然意識してゐるだらうか。覺醒させ、意識させるのが學者の一大きな責務である。かの滿洲事變が世界新秩序建設への最初の巨歩であ

り、支那事變亦、實は、現状維持的歐米勢力に對する反擊であり、それ等が獨、伊の急激な擡頭を促し、第二次歐洲大戰を勃發せしめた現實は、かつて黄金の島として日本が、マルコポーロに深き憧憬の念を生ぜしめ、それがやがて、コロンブス、ヴァスコ・ダガマをして夫々の業績を擧げしめ、近世世界史の扉を開かしめるに至つた現實と共に、日本が世界の根軸たる所以を證するものなりとは既に論じ盡された所であるが、それと共に日本の餘く、重き使命達成の基礎となり、眞に日本人を覺醒さすべき、日本國土の地理的優秀性・冠絶性が新しく明にせられねばならない。而も之こそ萬邦をしてその所を得せしめるべき、「日本本來の地理學の最初の任務」ではなからうか、之を明示してゐるのが本書である。

今や日本人自らの手に依つて世界史の轉換、進展が着々と行はれてゐる。然し思へば久しい亞細亞の屈辱ではあつた。多くの亞細亞民族の住む所、其處は從來歐米舊秩序諸勢力に依つて植民地化せられた。彼等の國土、資源は悉く掠奪、擄取せられ、彼等の一切の力と傳統と文化は根柢より破壊し盡され、遂にその民族は死滅すら強制せられたのであつた。然り、彼等を歐米舊秩序諸勢力の壓迫、桎梏より解放し、あらゆる土地の可能性、或は潛勢力を正しく開顯利用し、正しき歴史を創造することこそ日本に課せられた天の使命ではなかつたか。かくして大東亞戰爭は勃發すべくして勃發したのである。而してかかる日本の尊く大なる使命達成の爲には、現状が認識され、欺瞞と矛盾が剔抉打破せられ